

Title	高鳥先生の弟子教育の一面
Sub Title	
Author	黄, 清溪(Ko, Seikei)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2000
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.73, No.6 (2000. 6) ,p.155- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	高鳥正夫先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20000628-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高鳥先生の弟子教育の一面

高鳥正夫先生のお人柄については、人の話によく耳を傾け、いつも笑顔を絶やさず、親切で優しさ溢れる、多くの人を魅了してやまない、という高潔な人格の蓋棺定論には異論を唱えるものはない。しかし、先生は門下生の教育において、この定評と相反する、意外な一面があることについて、私が先生の門を叩いた時に体験した二、三のことを通して、紹介しよう。

私が最初に先生の教えを仰いだことは、専門の法律問題ではなく、図書館の利用法でした。日本にきて間もない留学生の私が、あこがれの塾の図書館に第一歩踏み入れたとき、図書、資料の豊富さ、博大さに圧倒された。近代的開放式の図書館運営に慣れなくて、利用についても手も足も出なくて、呆然とした状態でした。そこで、私は資料収集の要領や、図書館の利用法も指導範囲と勝手に決めつけ、先生のノー・ハウを吸収できればと思っ

問題についてはこれだけで、それ以上のお話はなにもなかった。先生の研究室を出てから、ズーッと不可解のままであった。翌週の授業終了前の片刻を利用して、先生は、数人の院生に図書館利用法を述べさせた。しかし、依然として、先生はご自分のものを披瀝してくれなかった。その後、仕方なく、私は他人の方法を参考にしながら、足繁く図書館に通った。回数と工夫を重ねたところで利用したい図書・資料の大部分は図書館の何階の何列の棚にあるかを、頭に覚えた。それから機能的・効率的な利用ができたのである。なるほど、利用法には、それぞれの使い勝手があるから、微妙な差異が生じる。これは他人から教えられるものではないことを悟ったのである。

ところで、専門分野の問題を先生に質問しても、容易に教えてくれない。大抵の場合に、「私もよくわからない」との答えでした。聞く者ががっかりさせる。不親切・冷たい先生という不評がながれていた。私も同感であった。私がある問題について、自分なりの考えを整理してまとめた。それは未熟なものであることは承知の上で、先生のご指導とご批判をお願いしたが、先生はその内容を聞いてくれた後に、「そうですね、研究会で発表

したらどう」と一言いわれただけで、良いも悪いもなんの評価もなかった。てっきりこれでうまくいけると喜んで、研究会に臨んだ。ところが、それが四方八方から猛攻撃され、先生も敵陣に立って批評に加わっていた。無惨な結果であった。相談したのに、なんとという無情だと内心で感嘆した。

しかし、こんなこともあった。秀才的存在の仲間 K 氏が助手として採用されたが、大変不幸なことに間もなく精神的病症を患われた。研究生活に支障が生じ、助手に残すべきかどうか、先生は難しい局面に迫られた。主治医の否定的アドバイスがあったにもかかわらず、奇跡的回復の一念で、先生は即断を避け、最大限に延ばした。

その間、関係する先生方のご意見だけでなく、われわれ部外者の院生達にも意見を真剣に聴取された。慎重に慎重の上で苦しい決断を下したのである。先生の大変心痛心労の様子がいまだに鮮明に脳裏に焼き付いている。不運に遭った教え子を守るために先生の捨身的努力、それは師が弟子に対する至愛以外のなにもでもない。以前とは異なり、偉大な先生だと、心底から敬愛したのである。その後、K 氏の行き方を案じて、長い間、先生は単なる連絡だけでなく、何回も遠くまで出かけられて、

お会いになり、様子を伺っておられたのである。

温かく、優しい先生なのに、われわれ弟子達には、冷たい、不親切としか映らなかった。なぜなのか、それが先生の教育観の真髓なのである。

教育とは何か、それは心靈の感応と感動から生成する自己啓発・成長である。俗世で評価されている強烈的權威と過剩的信念を持つて教えに当たることは、本質的教育ではない。イギリスにはこういう諺がある。「教会に近づけば近づくほど、神からは遠ざかる」。教えよう教えようと懸命にすぎると、そのもの自体が変質するために、教育でなくなる、ということをして、先生は見抜いている。

先生の心の中には、れっきとした教育観が息づいているのだ。師の親切・親密な介入は弟子の思考力を萎縮させる。反対であれば、それが伸び伸びと成長する。同時に、学生各々の環境・背景なり、性格、価値観なり、理性、感情なりといったものを冒すものではないと考えたのではないか。いや、そういう人間としての尊厳は教育といえども冒すことを許さない。各々の尊厳が尊重されてから、独立自尊の気概が生まれる。そして、自己判断・自己責任の力が身に付く、それが創造性の聖なる母

になるのである。

先生がわれわれに対して、不即不離の姿勢を固守したのは、このような思想根源があったからである。先生は福澤諭吉先生の独立自尊精神の深い理解に立脚した教育実践者であったと私は思う。

拓殖大学教授 黄 清 溪